

二体の西郷銅像（鹿兒島と東京）

鹿兒島の歴史といえますと、西郷・大久保。二人の人物像を銅像から見えていったほうが分かりやすいんじゃないかなと思います。

銅像の制作者は、その人物の研究者と言っても間違いではありません。何年もかけて研究し、そして、いろいろなものを表現していくことですので、単にポーズだけではなくて、その人の生き方、信念、考え方まで表現していくというのが、彫塑を制作される方々の心意気といえますか、真髓だと思うからです。

◇「これは、やどんしじゃなか」——上野の銅像にまつわるエピソード

西郷の銅像は、鹿兒島にももちろんありますし、東京上野の西郷銅像も有名です。東京にありますのは、上野の西郷銅像、明治三十一年に作られたものでありますが、あの銅像ができてから、上野のあたりは大変開きたいわれています。この銅像を制作した人は、高村光雲という人です。そして、犬を作った人はまた別で、後藤貞行という人です。

ところで、除幕式の時に銅像を見た西郷の奥さん、イトさんが、鹿兒島弁で、「これは、やどんしじゃなか」といったそうです。「うちの主人ではない」ということです。顔が似てないということよりも、



高さ 3.70m 足半（あしなか）の草履を履いている

ああいう着流しの姿で、まあ人前にだらしのない姿で、と、イトさんにはそういう風に映ったのだらうと思います。西郷さんは、村の若い衆が来ても、質素であつたけれどもきちつと服を着て、玄關に送り迎えまできたといえます。そういう礼儀正しい人であつたということですので、イトさんは一瞬びっくりしたのでしよう。

除幕式の時には、イトさんの隣に西郷従道がいます。従道の娘、桜子が除幕式で紐をひいています。イトさんがせっかくみんなが作ってくれた前でそういうことを言つたものですから、恥ずかしかつたんでしょう。従道はイトさんをなだめた、という逸話が残っています。

記録の中では、銅像の姿としてアイディアが三つあつたといわれています。まず一つはこの着流しの姿、それから西郷さんは陸軍大将ですから軍服姿。それからもう

一つは、えぼうしひたたれ烏帽子直垂の礼服だつたといえます。西郷さんは西南戦争で朝廷に弓を引いたということもあり、賊名を浴びるわけですので、そういう人が、軍服姿で東京にたつというのはいかかなものか、というケチもついたということなんです。西郷さんは狩りが大変好きでした。犬を連れた姿は非常に庶民的で親しみやすいということ、そういう形になつたといわれています。もし、そのときのスタイル、格好が、西郷銅像の今の格好と違う形であつたら、鹿兒島に対するイメージやそのほかの皆さんのイ

メーヅも変わっていたかもしれません。もし、烏帽子直垂、あるいは軍服姿であったとしたら、上野の西郷さんは、あそこにあれほど人が馴染んではこなかったのではないかと思います。

◇研究を重ねて十年余りで完成―鹿児島島の銅像

東郷平八郎などが中心となって鹿児島に西郷銅像を作ろうということになり、奉賛会が結成され、その西郷奉賛会の責任者に東郷がなり、制作を安藤照という人にお願ひするんです。

この安藤照は、鹿児島市新屋敷町に生まれた人です。東京の渋谷駅前の忠犬ハチ公像、あれを作った人です。当時は東京にアトリエをもっていました、そのアトリエで銅像を作って、東京から貨車で鹿児島まで運んできたといひます。



安藤照は、西郷さんという人が、いろいろな人から崇拜された人であり、また郷里の鹿児島に作るということもあって、研究に研究を重ねました。国内はもちろん、ヨーロッパにも出かけています。銅像を作るまでの間、八年ほど研究を続け、結局十年後の昭和一二年の五月二三日建立されました。いかに銅像制作に魂を打ち込んだか分かっていただけるんじゃないかと思ひます。

しかし鹿児島の人たちはこの銅像にさえ満足しなかつたといひます。それは、鹿児島の銅像は軍服を着ていますから、この軍服になぜ勲章をつけなかつたかという人もいて、盛んに安藤照を責め立てたといひます。安藤照も、最初はこの軍服姿に勲章をつけようと考へたんですけれども、西郷さんの性格からいって、華美なことを嫌ひ、派手なことをしたり、その威厳をもつて人に知らしめるということを大変嫌つた人でしたので、おそらくこの陸軍大将の軍服姿に勲章をつけても、西郷さんは決して喜ばないんじゃないか、そこまで考へた上で安藤照は勲章をつけなかつたといひています。

幸ひ、西郷さんの軍服が残つていたので。実は西南戦争の時に、宮崎県延岡市北方の可愛岳えのだけの麓に長井村というところがあり、薩軍は押し込められました。西郷さんは、もうこれで最後だということで軍を解き、軍服も焼きました。その時の軍服というのが、新しく作つた軍服でした。古い軍服はというと、明治になつて習志野で、明治天皇を迎えて軍隊を訓練をさせる「訓練」があつたんです。その時に天皇に付き添つたのですが、天気が悪くて、一晚中雨が降りました。西郷さんはずぶぬれになりながらも夜中も天皇のそばにいて世話をしたんです。その時の濡れた軍服が今も残つており、安藤照はその軍服を参考にして銅像を作つたんです。つまり古い軍服を見て作つたわけです。

◇なぜ西郷の写真はないの？

西郷の写真だ、といって世間に出回っているものもありますが、実証されたものは一枚もありません。肖像画にキヨソネというイタリアの版画家が描いたものがあります。この人は、大久保利通も一緒に描いています。描いたのは明治十六年。西南戦争が明治十年ですから、西郷さんが亡くなってから六年後に描いています。キヨソネの描いた肖像画は、顔の半分上は、弟である西郷従道を見て、半分下は従弟の大山巖を見て描いたといわれています。大山巖のお父さんと西郷さんのお父さんは兄弟、つまり従兄弟同士なんです。

西郷さんは写真を嫌った人でした。そのため西郷さんの写真は一枚もないといわれています。写真というのは生きている証、当時は威厳のあるものだったわけです。西郷さんという人は明治維新で多くの人たちが死んでいることから、生き残った自分が、自分の功績や存在を人にひけらかすという、そういうことを嫌ったのだと思います。

それからもう一つ、これが一番大きいと思いますが、西郷さんは自分自身を一度死んだ人だと思っているわけです。島津斉彬亡きあと、鹿児島湾に自分のお師匠さん、清水寺の成就院の僧であった月照と入水します。そして、自分だけ助かり生き残ります。この時にやはり、自分だけが生き残ったことに対して非常に罪悪感を覚えるわけです。

昔の武士というのは、「潔しとせよ」というのが士道ですから、それをおめおめと生き残り、生き恥をさらしたことを悔いたのです。それ故、以後は「今まで生き残ったというのは、もつと世のため人のために生きなさい」ということだと考えるようになりました。このことから自分は一旦死んだ者だと考えて、一度死んだ者が写真を撮られるなんてことは、考えられないと思うようになったのでしょう。これが実は、一番大きな理由であるといわれています。

また、西郷さんは二度遠島になってます。特に二度目は徳之島からさらに沖永良部島へと流罪になってます。沖永良部ではそのため牢の中に入れられました。西郷自身、自分はまだ俗世間から離れたものと考えていましたが、再び中央政界に再び咲くわけです。西郷さんに見ると写真撮るといふことは「私はこういう風に立派になりましたよ」といっているような気がしたのでしょうか。だから写真を撮ることを嫌がり、明治天皇が西郷さんに写真を所望したときでさえ、「そればかりはお許しください」と断ったといえます。したがって写真は一枚もないと考えた方が正しいと思います。



エドアルド・キヨソネ画